

近世仏塔の意匠と構造(2) — 東北・関東地方の遺構 —

濱 島 正 士

- 一、遺構の分布状況と建立年代
- 二、大工と彫物師
- 三、柱間寸法と柱長さ
- 四、各部の様式手法
- 五、内部の状況と組上げ構造
- 六、細部の装飾

一、遺構の分布状況と建立年代

東北・関東地方（便宜上新潟県を含める）には、五重塔六基・三重塔一七基・多宝塔七基・宝塔一基、合わせて三一基の近世仏塔が残されている¹⁾。東北六県では宮城県、関東七県では群馬県に一基もないが、これは中世以前の遺構についても同様である。五重塔は関

東地方に四基あって、他地方に比べて数が多い。工事費がかさみ、技術的にもむずかしい五重塔であるが、幕府の膝元であるだけに、比較的多く建てられたとみるべきであろう²⁾。事実、本門寺・旧寛永寺両五重塔は幕府の作事方によるものであるし、東照宮五重塔が幕府の命により建立されたことは改めていうまでもない。多宝塔は、東北地方には一基しかなく、関東地方ではほぼ各県に一基の割で残されている。東京都には多宝塔が無いかわり、全国的にも数の少ない本格的な宝塔が一基残されている。多宝塔は、遺構でみると地域的な片寄りが顕著で、中世以前も含めた八二基のうち、愛知・京都・大阪・兵庫・和歌山の五府県で半数の四一基を占めており、東北・関東地方には一三基しかない。

建立年代については、三一基のうち桃山時代及び江戸時代初・中期が一五基、江戸時代後・末期が一六基で、近世前半と後半がほぼ

半々となる。³⁾

なお、これら遺構のほか、東北・関東地方の塔の資料として、昭和三十二年に焼失した感応寺五重塔(東京都台東区谷中、寛政三年)の安政三年の古図(縮尺二〇分の一、東京都立中央図書館蔵)と、実現には至らなかった円蔵寺三重塔(福島県河沼郡柳津町)の板図(文政頃、縮尺一〇分の一、国立歴史民俗博物館蔵)が残されているので、これらも含めて検討を進めることとする。

二、大工と彫物師

東北・関東地方の近世仏塔三一基のうち、建立に関与した大工の名前が判明するのは、五重塔四基・三重塔一二基・多宝塔五基・宝塔一基の合わせて二二基である。このうち、本門寺・寛永寺両五重塔は前述のように、幕府が造営したもので、前者には鈴木近江守長次(御大工)と三鬼島長門守(棟梁)、後者には甲良豊後守宗広(大工)と甲良宗久(棟梁)の名がみえる。同じ幕府の関係でも東照宮五重塔は若狭藩主酒井忠進が造営を受持ったことから、大工棟梁は同藩出入りの江戸神田の大久保喜平治である。

また、乙宝寺三重塔については、棟札に大工京都小嶋近江守藤原吉正とあるので、京都の大工が建てたものと考えられる。この塔の

造営には村上藩主堀直寄が関与しているためであろうか。

これら四塔のほかは、各遺構の地元あるいは近国の大工の手になるものらしい。以下、北の方から順にみていくと、

一 慈恩寺三重塔 棟札に匠長当山布川豊真とある。文政八年の同塔絵図には吉田村(現西村山郡河北村)・渡辺熊蔵とあるのは設計者であろう。

二 安久津八幡宮三重塔 大工棟梁は伊達鳥取村(現在の福島県伊達郡国見町)の山口右源司。国見町は塔のある山形県東置賜郡高畠町のすぐ東にあたる。

三 安洞院多宝塔 寺伝にいう藤原右源次は住所・姓が不明であるが、塔の所在地や建立年次からすると、安久津八幡宮三重塔を建てた山口右源司と同一人である可能性が強い。

四 法用寺三重塔 板図に大工棟梁当国^中山次衛門・越^口仙七とあるので、会津の大工によって設計されたことが分かる。

五 薬法寺多宝塔 大工棟梁柴山播磨正始治は地元真壁郡大曾根村(現大和村)の大工で、笠間稻荷神社本殿(笠間市、万延元年)なども手掛けている。

六 薬王院三重塔と新勝寺三重塔 両塔とも大工は薬王院にほど近い常陸国中郡羽黒村(現茨城県西茨城郡岩瀬町)の桜井瀬左衛門。桜井瀬左衛門は前記薬法寺の本堂(宝永四年)なども手掛

三、柱間寸法と柱長さ

けている。

七 高勝寺三重塔 露盤銘に江戸神田の太工小幡仁左衛門と、塔大工として下野国駒場村（現足利市）の大山平六の名がある。

八 観音経寺三重塔 棟梁は地元芝山町山中の清宮吉兵衛。

九 那古寺多宝塔 棟梁大工として府中（現在の安房郡三芳村）の上野庄右衛門ほか地元近在の六人の名がみえる。三芳村府中は館山市のすぐ北隣り。

十 西福寺三重塔 大工は江戸牛込水道町の内木市兵衛。

十一 本門寺宝塔 工匠として地元池上の山本新七信盛と山本卯之助清仲の名がある。

十二 最乗寺多宝塔 大工棟梁は藤沢の相模匠藤原直行林嘉右衛門。

十三 妙宣寺五重塔 同じ佐渡の相川（現佐渡郡相川村）の茂左衛門。

このほか、日吉八幡神社三重塔・成就寺三重塔・長谷寺多宝塔については、それぞれ大工の名前は判明するが、何処の人かは明らかでない。

つぎに、東北・関東地方の近世仏塔は、他地方に比べると彫刻類を付けた装飾性の強い遺構が多い。これは仏塔に限ったことではなく、近世の社寺建築全般についていえることはあるが、とくに彫

刻が多いのは、五重塔では妙宣寺塔、三重塔では普門寺・薬王院・不動院・新勝寺・観音経寺各塔、多宝塔では安洞院・那古寺・最乗寺・長谷寺各塔などである。これらの遺構について、現時点で彫物師の名前が判明するものは少なく、新勝寺・最乗寺両塔だけである。前者は円哲無閑、後者は後藤豊次郎、いずれも江戸の人である。ただし、彫物師がどの彫刻を担当したのかは分からない。新勝寺三重塔と同じ大工が建てた薬王院三重塔については、残念ながら心柱墨書の全文が読み取れないこともあって、判明しない。

三、柱間寸法と柱長さ

(イ) 五重塔

六基の五重塔について初重総間をみると、妙宣寺塔一一・五五尺、最勝院塔一八・九二尺のほかは四基ともほぼ一六尺である。初重総間一六尺は、「匠明」がそうであるように、近世においては五重塔の標準的な規模であったのだろう。四基の枝割をみると、初重は本門寺・法華経寺両塔が三七枝、旧寛永寺塔が三四枝、東照宮塔が三二枝で、東照宮塔は一枝五寸として丁度一六尺の完数としたことが分かる。旧寛永寺塔は一枝四・七寸、法華経寺塔は一枝四・三

五寸として、総間寸法をできるだけ一六尺に近づけたものであろうか。東照宮・法華経寺・旧寛永寺三塔はいずれも、二重以上は各重各間で一枝ずつ減らしている。東照宮・法華経寺兩塔は五重のみ扇垂木であるが、柱間寸法は枝割によって決められている。本門寺塔は、初重を一六尺の完数とし、中央間一三枝・脇間一二枝に比例配分したものであろうか。二重以上は扇垂木で、実測値にややバラツキがみられるが、法華経寺塔と同じ枝数で割付けている。

最勝院・妙宣寺兩塔は、初重総間の寸法を尺の完数とするのではなく、一枝寸法をそれぞれ四・三寸、三・六寸として決めたのである。二重以上の通減は兩塔とも区々で、最勝院塔は五重を初重の丁度半分として計画し、その間は適当に減らしたものと思われる。四四枝の半分二二枝を減らすには、各重同一にすると五枝半ずつと端数がでるため、こうした通減になったのであろう。妙宣寺塔は少々ややこしく、初重と五重は中央間・脇間の一枝寸法が同じであるが、二・四重は違っており、初重・五重と同じ三・六寸と別の四・〇五寸と二種の一枝寸法が使われている。何故にこうなっているのかは明らかでない。

高さとの関係については、全体の高さは容易に実測できないので、柱長さ(縁上・台輪上)だけを見ることにする。初重の柱長さは総間の〇・四一・〇・五六であるが、とくに小さい値を示す最勝

院塔を除くと〇・五〇・〇・五六となつて、ほぼ一定になる。最勝院塔は規模の割には木割が細く、上重の通減が特別に大きい、初重は立ちが低く、横に長い比例をもつ。

感応寺塔の古図についてみると、初重総間は一八尺・三四枝、一枝五・三寸で、通減は二重のみ二枝ほかは三枝(五重の軒は扇垂木)、初重の柱長さは総間の〇・五に相当する。やや大型の五重塔であるが、枝割等は他の遺構ととくに変わるところはない。

(四) 三 重 塔

一七基の三重塔について初重総間の寸法をみると、五・四〇尺から一八・五尺まであって、一尺ごと(寸以下は四捨五入)に分けると次表のようになる。これで見ると、一四尺級と一五尺級が各四

5	尺	級	1	基
7	尺	級	1	基
10	尺	級	1	基
12	尺	級	2	基
13	尺	級	2	基
14	尺	級	4	基
15	尺	級	4	基
17	尺	級	1	基
18	尺	級	1	基

基、一二尺級・一三尺級が各二基となり、このあたりが東北・関東地方の近世三重塔の平均といえる。最も小さい五尺級の普門寺塔は、屋外に建てられた三重塔としては、おそらく全国でも最小の塔であろう。次いで小さい七尺級の成就院塔は、初重柱間を二間、二重・三重を一間とするなど、層塔の一般形式とは異なる。

初重総間の寸法は端数の付くものがほとんどで、五重塔のように明らかに尺の完数をとったと思われるものはない。ただし、旧四本竜寺塔は一八尺を予定して、一枝寸法四・七五寸、三八枝としたものと思われる。

枝割については、初重を中央間一二枝・脇間一〇枝・総間三二枝とするものが八基あって最も多いが、二重以上はかなり区々で、中国・四国地方でまとまってみられた、各間を二枝ずつ減らしたものとしては、西福寺・日吉八幡神社両塔しかない。残る六基のうち、慈恩寺・観音教寺両塔は二重以上を各間で一枝ずつ減らしており、通減率は最も小さい。高勝寺・法用寺両塔は一枝寸法が同じであるが、二重以上の枝割は異なる。法用寺塔は三重が扇垂木で、三重も下重の枝割によって柱間寸法を決めている点はほかと変わらないが、半枝の端数がでる点が珍しい。安久津八幡宮塔は二重で中央間二枝・脇間一枝、三重で各間一枝ずつ減らしているが、これは「匠明」に示す枝割と同じであり、全国的にも例の少ない遺構といえる。

(ただし、三重は扇垂木)。

乙宝寺・安楽寺両塔は、初重中央間一〇枝・脇間八枝・総間二六枝で、二重以上を各間一枝ずつ減らす枝割が同じであり、一枝寸法もほとんど同じになっている。同じ大工の手になる薬王院塔と新勝寺塔は枝割が同じで、初重中央間一二枝・脇間八枝・総間二八枝、二重以上各間を一枝ずつ減らしているが、一枝寸法は異なる。新勝寺塔は各重とも板軒であるが、軒支輪を本支輪とし、軒先には垂木の木口を造り出しているのが、枝割が分かる。初重総間の寸法は薬王院一五・〇九尺、新勝寺一四・一四尺、共に尺の完数にはなっていない。両塔の計画にあたっては、それぞれ一五尺級・一四尺級の規模を予定し、各重各間の枝数はすでに決まりがあるから、一枝寸法を加減して予定の規模に近づけたものと考えられる。この点は、備前邑久の大工田淵一族が建てた中国・四国地方の三塔でも同様であった。

つぎに、柱長さ(縁上・台輪上)の比例についてみると、初重では総間の〇・五〇〇・九四であるが、〇・九四の普門寺塔と〇・七一の高蔵寺塔を除くと〇・五〇〇・六六となり、五重塔と同じか少し大きめであることが分かる。普門寺塔は規模が例外的に小さいため軸部を特別に高くしたもので、他の塔とは比較にならない。二重・三重の柱長さは、二重が初重柱長さの〇・四〇五〇・五五で、

三重はそれと同じか少し小さい。一七基の中では最大の規模をもつ旧四本竜寺塔は、各重とも柱長さが最小の数値を示している。また、薬王院塔と新勝寺塔は初重、二重・三重とも少し比例が異なる。円藏寺塔板図をみると、初重総間一七・六尺で規模がかなり大きく、枝割は「匠明」と同じである（ただし、三重は扇垂木）。柱長さの比例は前記の数値内におさまっている。

(イ) 多宝塔

下重の総間寸法については、一〇尺級・一三尺・一四尺級・一六尺級・二〇尺級・二一尺・二三尺各一基ずつで、大規模なものがかなり多い。とくに二三尺の饅阿寺塔は、根来寺塔などの大塔形式を除くと全国でも最大規模の多宝塔遺構である。中国・四国地方も合わせて考えると、近世の方が中世よりも大規模な多宝塔が建てられたらしい。

下重柱間の枝割については、七基中四基が中央間一六枝・脇間一二枝・総間四〇枝としており、規模の大小にかかわらず同じ枝数をとるものが多い。この点、規模の大小によってふた通りの枝割を示す「匠明」とは異なる。前記の枝割をもつ遺構は、中国・四国地方でも八基中二基あった。軒を板軒とする安洞院塔は、中央間／脇間の比率が16／9になっており、やはり枝割によったことが分かる。

上重の大きさは、実測しえない遺構もあってやや資料不足であるが、軸部直径が下重総間の〇・四一～〇・六六となる。〇・四一の石堂寺塔、〇・六六の薬法寺塔を除くと饅阿寺・那古寺兩塔が〇・五二、最乗寺塔が〇・五二五で、この三基は平均的な数値といえる。石堂寺塔は中世以前の遺構中最小値を示す金剛三昧院とはほぼ同じであり、室町時代建立の前身塔があったとしても些か小さすぎる。反対に、薬法寺塔は例をみない大きな数値であり、多宝塔らしからぬ比例といえよう。

柱長さ（縁上／台輪上）については、下重が総間の〇・三九／〇・八五で、小規模とはいえ極端に大きな数値の安洞院塔を除くと〇・三九／〇・五五となる。大規模な三塔をみると、薬法寺塔は〇・五四で規模の割には大きな数値を示すが、長谷寺塔〇・四五、饅阿寺塔〇・三九と小さく、やはり横に長い比例をもっている。

四、各部の様式手法

(イ) 五重塔

軸部については、本門寺塔が初重を和様、二重以上を禅宗様としているが、ほかは五塔とも和様の手法によっており、頭貫に木鼻を

四、各部の様式手法

付けるものもない。初重の柱間装置は、本門寺塔が中央間棧唐戸・脇間彫刻付板壁、旧寛永寺塔が中央間板扉・脇間連子窓、妙宣寺塔が中央間棧唐戸・脇間格子戸、ほか三塔は中央間棧唐戸・脇間連子窓で、六塔とも四面同じ構えとしており、外観上は正面性をもたない。

組物は六塔とも三手先で、様式は本門寺塔が軸部と同じく初重和様、二重以上禅宗様、東照宮塔が五重のみ禅宗様、ほか和様、あとの四塔は各重同じで、法華経寺・旧寛永寺兩塔が和様、最勝院・妙宣寺兩塔がほぼ和様である。最勝院塔は禅宗様のように一手目にも秤肘木・通肘木を通し、尾垂木・支輪は一段で、初重・二重を本支輪、三・五重を板支輪とする。妙宣寺塔も初重は一手目に秤肘木・通肘木を通して支輪のみ二段に組み、上段本支輪・下段彫刻付板支輪とする。二重以上は和様の組み方であるが、隅斗拱だけ一手目に秤肘木（二重は絵様肘木）を入れるなど正規の手法ではない。拳鼻は本門寺塔の二重以上と、法華経寺・東照宮・妙宣寺の三塔にある。

中備は、法華経寺塔を除く五塔が初重を三間とも藁股とし、妙宣寺塔以外の四塔は藁股に十二支の彫刻（最勝院塔は彫刻ではなく文字を刻んだ束を立てる）を入れている。二重以上は妙宣寺塔が中央間藁股・脇間簀束、ほかの四塔は各間簀束又は撥束で、上重では適宜省略している。法華経寺塔は各重とも簀束を立てるが、三重以上の裏側にあたる東・北二面では簡単な撥束に代えている。

軒については、本門寺塔の二重以上と、東照宮・妙宣寺兩塔の五重が扇垂木で、この三塔のその他の重及び旧寛永寺・最勝院兩塔の全重が平行垂木である。法華経寺塔も現在は五重のみ扇垂木、ほか平行垂木であるが、もとは五重も平行垂木であったらしい。

以上のように、軸部・組物・軒全体についてみると、すべてを和様で統一しているのは法華経寺・旧寛永寺兩塔だけで、本門寺塔は初重のみ和様として二・五重を禅宗様で統一し、東照宮は初・四重を和様で統一し五重は和様と禅宗様を混用している。最勝院・妙宣寺兩塔は全体がほぼ和様であるが、組物に禅宗様の手法が混じる。和様と禅宗様を混用する、というより様式として区別しなくなるのは、すでに室町時代から社寺建築全般にわたって行われていることであるが、伝統性の強い五重塔にもそうした手法がみられるのは、やはり時代の流れというべきであろう。

感応寺塔の古図をみると、初・四重は和様で統一し、五重は軸部が和様、軒が扇垂木の禅宗様で、組物には尾垂木を二段組とするなど禅宗様の手法が混じる。この構成は東照宮塔に似ており、初重中備を十二支彫刻入りの藁股とする点も同じである。

(四) 三重塔

三重塔一七基のうち、成就院三重塔は特異な形式をもっていて、

柱間を初重二間、二重・三重一間とし、柱は円柱ではなく八角柱である。普門寺塔も少々変っていて、各重ごとに軸部・組物・軒の形式が異なる。以下、各部について個別にみてみよう。なお、すべての塔が初重に縁・床を設けており、基壇上に立つものがない点は、五重塔と同様である。

軸部は、ほとんどの塔が和様であるが、日吉八幡神社・普門寺兩塔は禪宗様に長押を付けた形になる。高蔵寺塔は和様であるが、長押はない。日吉八幡神社・普門寺兩塔は当然ながら頭貫・台輪とも木鼻を付けるが、隠津島神社・安久津八幡宮兩塔でも頭貫に木鼻を付けている。これら頭貫木鼻をもつ四塔のうち、安久津八幡宮・普門寺兩塔の木鼻は象鼻や獅子鼻の掛鼻で、後者ではこれが隅だけでなく平柱にも付く。

初重の柱間装置については、四面とも中央間幣軸付板扉（又は棧唐戸）・脇間連子窓とした正規の構えをもつものは、乙宝寺・安楽寺・隠津島神社・西福寺・旧四本竜寺の五塔（西福寺・旧四本竜寺兩塔は棧唐戸）だけで、ほかは脇間を火灯窓とする（日吉八幡神社塔）、脇間を板壁とする（安久津八幡宮・普門寺・慈恩寺・観音経寺各塔）、脇間板壁に窓框を回して彫刻等を付ける（薬王院・新勝寺・高勝寺・不動院各塔、不動院塔は彫刻ではなく文字）など多彩である。このほか、脇間は正面と側面前の間を格子窓、ほかを板壁

とした法用寺塔、正面を中央間棧唐戸・脇間異形窓、側面中央間板戸引違、ほか板壁とした高蔵寺塔、中央間を正面火灯口、ほか三面棧唐戸、脇間を板壁とした普門寺塔のように、柱間装置を四面で変えた塔もある。層塔は本来外観上は四面同じで、正面性をもたない。正面中央間の扉構だけをほか三面と変えた例は岡山県の塔にもみられるが、法用寺・高蔵寺・普門寺各塔のように脇間も合わせてそっくり変えてしまう例はあまりない。

つぎに組物は、安久津八幡宮・成就院・普門寺の三塔が二手先（普門寺塔の三重は二手先）のほかは、定法どおり三手先である。安久津八幡宮・成就院兩塔は尾垂木を付けたほぼ和様の二手先であるが、普門寺塔は初重が特異な形式の二手先、二重がほぼ禪宗様の二手先、三重は禪宗様三手先である。

三手先とする一四塔のうち、各重とも和様の手法（一手目に秤肘木・通肘木がなく尾垂木・軒支輪が一段）をもつものは一〇塔で、そのなかで薬王院・新勝寺・不動院三塔は尾垂木を竜頭などの丸彫り彫刻としている。日吉八幡神社・法用寺・観音経寺の三塔は、ほぼ和様でありながら、禪宗様のように尾垂木を二段組としており、観音教寺塔は尾垂木が竜頭の彫刻である。高蔵寺塔は尾垂木は一段であるが、一手目にも秤肘木（二段）と通肘木を入れ、上段秤肘木を十枝掛の長い肘木とした、特異な手法をもつ。

尾垂木・軒支輪を一段とする前記一〇塔のうち、軒天井を組入天井、軒支輪を本支輪とする正規の手法をもつものは八塔で、旧四本竜寺塔は組入天井に菱支輪、不動院塔は天井・支輪とも彫刻付厚板である。尾垂木・軒支輪が二段になる日吉八幡神社塔は本支輪（三重のみ板支輪）、法用寺塔は上段彫刻付板支輪、下段菱支輪（二重のみ本支輪）である。観音経寺塔は尾垂木を二段としながら、一手目に秤肘木を一段余分に入れ（絵様肘木）、支輪は彫刻付板支輪一段としている。

拳鼻は、乙宝寺・安楽寺・西福寺・日吉神社・慈恩寺の五塔になく、ほか一二塔には付けられている。

中備については、撥束とするのが乙宝寺・安楽寺両塔（ともに二重・三重の脇間には無い）、簀束とするのが隠津島神社塔（各重各間に入れる）で、初重各間に簀股をおくものとしては、西福寺・旧四本竜寺・高勝寺・慈恩寺の四塔があり（慈恩寺塔は正面脇間のみ雲竜の彫刻）、このうち慈恩寺塔を除く三塔では中に十二支の彫刻を入れ、二重・三重は撥束又は簀束としている。慈恩寺塔は二重・三重には何もおかない。初重の中央間を簀股、脇間を簀束とするものは法用寺・安久津八幡宮・普門寺の三塔あるが、二重・三重は三塔区々である。日吉八幡神社塔は初重中央間のみ簀股をおく。中備をおくのではなく琵琶板全面を彫刻で埋めるものとしては、新勝寺・

不動院・観音経寺の三塔（各重）と薬王院塔（初重のみ）がある。なお、高蔵寺塔は何もおかない。

このように、組物の手法には様々なものがあって、伝統的な和様三手先といえるものは、乙宝寺・安楽寺・西福寺・慈恩寺四塔と、拳鼻を付けてはいるが隠津島神社・旧四本竜寺両塔ぐらいしかない。新勝寺等四塔のように斗栱間を彫刻で埋める手法は、他の地方ではほとんどみられず、いかにも関東の塔らしい。

軒回りについてみると、各重とも和様の平行垂木とするものは一七塔中九塔で、三重のみ扇垂木とするものが日吉八幡神社（一軒）・高勝寺・法用寺・安久津八幡宮・観音経寺の四塔ある。そのほかは、各重とも彫刻付板軒の新勝寺塔、初重平行垂木・二重彫刻付板軒（一軒）・三重扇垂木の普門寺塔、各重とも吹寄垂木（一軒）の成就院塔など、変った形式をもつ塔がある。

板図にみる円蔵寺塔は、軸部は和様で頭貫に木鼻はなく、初重の柱間装置は中央間を棧唐戸、脇間を火灯窓とする。組物は和様に近いが、一手目にも秤肘木を入れて尾垂木を二段組とし（初重のみ尾垂木は一段）、軒支輪は本支輪一段、中備は二重が三間とも簀股、初重・三重は彫刻で埋めている。軒は三重のみ扇垂木である。このように、各部ともとくに変わったところはない。

(ハ) 多宝塔

まず、下重についてみると、軸部は七塔ともほぼ和様で柱は石堂寺・那古寺両塔が方柱、ほか五塔が円柱、台輪は七塔とも備えられており、頭貫には長谷寺・安洞院両塔で木鼻が付いている。長谷寺塔では柱頂部に粽をとり、頭貫木鼻の先端を籠彫りとし、台輪にも木鼻を付ける。安洞院塔の頭貫木鼻は象鼻の掛鼻で、隅だけでなく平柱にも付けている。

柱間装置は、四面同じものとしては、中央間棧唐戸・脇間連子窓とする楽法寺・最乗寺両塔、中央間板扉又は棧唐戸・脇間窓框内彫刻とする石堂寺・那古寺両塔、三間とも棧唐戸とする長谷寺塔がある。残る二塔は正面・側面・背面で少しずつ違っており、饅阿寺塔は正面棧唐戸・火灯窓、両側面格子窓・板壁、背面片引戸・板壁、安洞院塔は正面棧唐戸・格子窓、側面棧唐戸・板壁、背面各間板壁としている。このように四面の柱間装置を変えることは、多宝塔ではすでに室町時代から例がある。

組物の形式は、石堂寺・饅阿寺両塔が出組、長谷寺・那古寺・最乗寺の三塔が二手先、安洞院・楽法寺両塔が三手先である。多宝塔の下重は、本来は裳階であるから、柱は方柱で、組物は上重(身舎)より手先の少ないのが一般形式であったが、近世になると本来の形

式は忘れられ、層塔と同じように上重・下重とも三手先とするものもでてくる。様式は長谷寺塔が禅宗様、最乗寺塔もほぼ禅宗様、ほかの五塔がほぼ和様で、長谷寺塔は塔には珍しく詰組としている。

軒支輪は出組の二塔も含めて七塔すべてにあり、長谷寺塔が本支輪、石堂寺塔が本支輪形の厚板に菱支輪を描くほかは、厚板の板支輪に彫刻を付けている。拳鼻は石堂寺塔を除く六塔にあり、そのうち那古寺塔は獅子鼻と象鼻を二段組みとしている。

中備は、六塔のうち石堂寺・那古寺・饅阿寺・最乗寺の四塔が各間簪股(最乗寺塔は十二支の彫刻を入れる)、楽法寺塔は中央間簪股形彫刻・脇間撥束で、安洞院塔は何もおかない。詰組の長谷寺塔は琵琶板に彫刻をはめ込んでいる。

軒回りは安洞院塔を除く六塔が二軒平行垂木、安洞院塔は彫刻を付けた厚板の二軒の板軒で、正面には軒唐破風を付けている。多宝塔で彫刻付板軒の例は四国にもあるが、唐破風を付けた例は、遺構では多宝塔のみならず層塔にも無い。安洞院塔は柱間装置だけでなく、軒においても正面性を明確にしたものといえよう。

つぎに、上重をみると、軸部は七塔とも定法どおりであるが、長谷寺塔では隅柱に相当する四本の柱に大きな木鼻を付け、これが手先肘木の持送りを兼ねている点が少し変っている。

組物は、楽法寺塔が普通の円形ではなく十二角形に造っているの

が珍しい。形式は長谷寺・安洞院・楽法寺三塔が三手先、他の四塔は定法どおり四手先である。このうち三手先の、長谷寺・安洞院両塔と四手先の最乗寺塔はほぼ禅宗様である。禅宗様三手先の場合は尾垂木・軒支輪とも二段組みとなるのが定法であるが、長谷寺塔は軒支輪が三段、安洞院塔は軒支輪が一段である。三重塔と同じく尾垂木を丸彫り彫刻とするものがあり、長谷寺塔（上段の平）・那古寺塔・最乗寺塔（下段）が竜頭、最乗寺塔（上段）が雲文になっている。軒支輪は彫刻付板支輪が多く、そうでないものは鏝阿寺（本支輪）、石堂寺（本支輪形板支輪）両塔だけである。拳鼻は石堂寺・那古寺・鏝阿寺三塔になく、ほか四塔にはあって、そのうち最乗寺塔は鳥の丸彫り彫刻（鳳凰か）としている。このほか、長谷寺・最乗寺両塔は琵琶板を彫刻で埋める。なお、組物部分を十二角形に造る楽法寺塔の場合も、手先肘木の配置は普通の場合と同様である。

以上のように、多宝塔も組物の手法は多彩であって、正規の和様四手先をもつのは石堂寺・鏝阿寺両塔ぐらいで、伝統がくずされていることが分かる。安洞院・楽法寺両塔は、上重・下重を同じ三手先としており、多宝塔でありながら層塔的な扱いを受けているといえよう。これは、四国地方の弥谷寺多宝塔にもみられたことである。軒については、上重・下重とも平行垂木とするのが石堂寺・那古寺・楽法寺の三塔、下重平行垂木・上重扇垂木とするのが長谷寺・

鏝阿寺・最乗寺の三塔で、安洞院塔は上重・下重とも彫刻付板軒である。長谷寺塔では上重隅木に雲文の彫刻を付けているのが珍しい。

五、内部の状況と組上げ構造

(イ) 五重塔

初重の内部をみると、六塔とも四天柱を立てており、そのうち本門寺・法華経寺・最勝院の三塔は、四天柱々頭に粽をとって頭貫・台輪を組み、三斗をおいている。この三塔と同じ禅宗様の手法は、中世の遺構では厳島神社五重塔に例がある。三塔のうち、最勝院塔は少し変っていて、頭貫・台輪を組むのは来迎柱筋だけで正、側面は頭貫を虹梁形に造り、出桁を通して前二間を小組格天井、後ろ一間を竿縁天井としている。このように、四天柱々頭から天井にかけて前と後ろを区別し、塔には珍しい仏堂的な扱いになっている。残りの三塔は四天柱をそのまま天井へ立ち上げる通常の手法をとっているが、東照宮塔は四天柱と側柱とを繋虹梁でつないでいる。

心柱は、本門寺・最勝院両塔が天井上に、他の四塔が心礎上に立てられている。来迎壁は、本門寺・最勝院両塔のほか、心柱のみえる法華経寺塔にも設けられている。心柱があるのに来迎壁を設けた

塔は他に例をみない。法華経寺塔では須弥壇の構えも少々変っていて、正面の四天柱から前へ張出して設けられている。須弥壇は、本門寺・旧寛永寺・東照宮三塔では四天柱内に、最勝院塔では四天柱前柱から後ろへ離して設けられている。妙宣寺塔は未完成の状態にあって、来迎壁・須弥壇が無く、四天柱内には床も張っていない。心柱と須弥壇・来迎壁の構えは、本尊として祀る仏像の種別にも関係するもので、心柱があつて来迎壁の無い旧寛永寺・東照宮両塔は四方仏、心柱が無く来迎壁を設けた最勝院塔は大日如来、本門寺は多宝如来（いずれも独尊）を祀っている。法華経寺塔は釈迦・多宝二仏を祀るが、それがこうした構えを必要としたとは考えられず、些か不可解である。

二重以上については、梯子を設けて一応登れるようになってるのが本門寺・法華経寺・東照宮・妙宣寺の四塔で、仮床を張ったものもある。妙宣寺塔には天保以降の参拝者の落書が多くみられ、参詣者が三重以上に上っていたことが分かる。しかし、中国・四国・九州地方の三重塔にみられるような二重以上にも本格的に床・天井を張った塔は無い。

二重から上の組上げ構造は、側柱を下重地垂木又は地隅木上に、四天柱を繫肘木上に立てる（本門寺・法華経寺両塔）、側柱を丸桁桔上の柱盤に、四天柱を繫肘木上に立てる（旧寛永寺塔）、側柱を地

隅木上柱盤に立て、四天柱を下重四天柱頂においた柱盤上に立てる（妙宣寺塔）、側柱、四天柱とも下重四天柱上柱盤に立てる（最勝院・東照宮両塔）などの方式がとられており、側柱・四天柱とも下重地垂木又は地隅木上柱盤に立てる、最も基本的な積上げ方式をとるものは無い。四天柱を下重四天柱上柱盤に立てる槽方式の場合には、手先肘木尻は繫肘木にはならず、四天柱に差し止められる。法華経寺塔では、四天柱は足元を下重四天柱真に合わせて立てるため、傾斜して立つことになる。隅尾垂木と隅木は、最勝院塔を除いては六塔とも上重四天柱に差し止められる。その際、東照宮塔では下重の隅尾垂木・隅木が側隅柱を貫き通すことになる。最勝院塔では、隅尾垂木・隅木とも側柱あたりで止まる。心柱の立て方については、心礎に立つ四塔のうち、法華経寺・東照宮両塔では四重目の四天柱上柱盤から帯鉄や鉄鎖で心柱を釣り下げており、心柱足元は枘を造って心礎に差しているものの、柱底面と心礎上面との間には間隙がある。法華経寺塔の方は帯鉄が新しく、あるいは明治期の修理で改変されたものかもしれない。妙宣寺塔では、各重の床下位置で四天柱と心柱を貫で繋ぐ、他に例の無い手法がみられる。心柱は相輪を支持するだけで塔身からは独立した状態になっているのが普通の構造であるが、妙宣寺塔では塔身と心柱を一体化したことになる。これは、経年変化による塔身の縮みを心柱で防ぎ止めることを目的

としたとも考えられるよう。そうだとすると、塔身の縮みと共に心柱を下げようとした東照宮塔の方式とは逆のやり方ではあるが、塔身の縮みによる五重屋根と相輪露盤との間隙をなくそうとするねらいは同じといえる。

感応寺塔古図をみると、東照宮塔と同じように心柱を五重から鎖で釣り下げている。側柱と四天柱は組物上に盤を置いて立て、手先肘木尻は四天柱に差し止められる、槽方式になっている。

(四) 三重塔

三重塔一七基のうち、普門寺塔は規模が小さすぎて内部の調査が不可能なためこれを除き、成就院塔についても特殊な構造であるため別に論じることとする。

初重の内部は四天柱を立てるものが一五塔中九塔、来迎柱だけとするものが隠津島神社・薬王院・新勝寺・不動院の四塔、全く柱を立てないものが日吉八幡神社・高蔵寺の二塔である。中国・四国・九州地方の三重塔では一五塔中一四塔が四天柱を立てており、それに比べると東北・関東地方では内部の柱を省略するものが多い。柱を全く立てない日吉八幡神社塔は普門寺塔に次ぐ小規模な塔であり、また、高蔵寺塔はとくに小規模とはいえないが、全体に変わったところが多い塔である。四天柱・来迎柱上の納まりは、一三塔とも

長押を回して天井を張る、一般形式をとっている。頭貫・台輪を組み三斗をおく手法が全くみられないのは、五重塔とは対照的である。なお、法用寺塔では四天柱・側柱間に繫虹梁を入れ、隠津島神社塔では来迎柱間に虹梁を入れている。来迎壁・須弥壇については、四天柱を立てる九塔のうち、来迎壁を設けて四天柱間を須弥壇とするもの五塔（乙宝寺・安楽寺・西福寺・旧四本竜寺・慈恩寺各塔）、来迎壁は設けずに四天柱間を須弥壇とするものが三塔（高勝寺・阿久津八幡宮・観音経寺各塔）で、残る法用寺塔は後ろの柱から後方へ張り出して仏壇を設けている。来迎柱だけの四塔のうち隠津島神社塔は来迎柱と背面側柱との間を囲って仏壇としており、あとの三塔は来迎壁を設け、須弥壇を取付けている。

柱を全く立てない高蔵寺塔は置仏壇であり、日吉八幡神社塔は現在は何もおいていない。なお、平安時代以降の三重塔では、心柱を心礎上ではなく初重天井上に立てるのが通例であり、この地方の一五塔もすべてそうになっている。

二・三重の内部については、梯子をかけて上へ上れるものが安楽寺・法用寺・安久津八幡宮（二重のみ）・慈恩寺の四塔あって、法用寺塔では二重に仮床が張られている。しかし、本格的な床・天井が張られていないのは五重塔の場合と同様である。なお、法用寺塔には文化年間以降、慈恩寺塔には天保年間以降の参詣者の落書が認

められる。

組上げ構造は、側柱・四天柱とも下重の地垂木又は地隅木上柱盤に立てる伝統的な方式が乙宝寺・慈恩寺両塔にみられる。この二塔は各部の形式手法も伝統的手法によっている正統派の塔である。隠津島神社塔は側柱を地垂木上柱盤に、四天柱を繫肘木上に立てる方式をとる。高勝寺・阿久津八幡宮・観音経寺三塔は側柱・四天柱とも下重の四天柱上柱盤（観音経寺塔では、これが丸桁桱になる）に立つ、櫓方式である。そのほかは、側柱を下重地垂木・地隅木上柱盤に立て、四天柱は櫓方式とする（西福寺・旧四本竜寺・不動院各塔）、側柱を下重尾垂木上柱盤に立て、二重四天柱は初重の繫肘木上、三重四天柱は二重四天柱上柱盤に立てる（薬王院・新勝寺両塔）、側柱を壁付斗拱上柱盤に立て四天柱は櫓方式とする（安楽寺・日吉八幡神社両塔）、側柱は桱木（四天柱へ差し止める）上柱盤に立て四天柱は櫓方式とする（法用寺塔）など、四天柱を櫓方式で組むものが多い。なお、薬王院・新勝寺両塔と日吉八幡神社塔では、四天柱の柱間が側柱より広く、前者では下重側柱間に合わせている。高蔵寺塔は少し変っていて、側柱・四天柱とも丸桁桱上に立つが、四天柱は側柱とほぼ同じ長さとし、側柱の頭貫と同じ高さに繋ぎ材を入れ、丸桁桱との間には束を立てている。

手先肘木尻が繫肘木となるのは、古式の積上げ方式である乙宝

寺・慈恩寺両塔のほか、隠津島神社塔と、薬王院・新勝寺両塔の初重、それに西福寺塔の二重・三重しかない。そのほかは、日吉八幡神社・高蔵寺両塔が側柱のすぐ内側で終り、残る七塔は四天柱へ差し止められる。また、隅尾垂木・地隅木は、乙宝寺・慈恩寺両塔ではこの上に上重の四天柱が立つが、櫓方式の場合は上重の四天柱に差し止められるものが多く、安楽寺・日吉八幡神社両塔を除く一〇塔ではそうになっている。その一〇塔のうち、側柱も櫓方式をとる高勝寺・阿久津八幡宮・観音経寺三塔の場合は、隅柱だけ隅木上に立てる（高勝寺・安久津八幡宮両塔）か、隅木が隅柱を貫き通す（観音経寺塔）かして、隅木が四天柱へ達することになる。安楽寺・日吉八幡神社両塔と高蔵寺塔では、隅木は側隅柱に差し止められる。このように、隅木はしっかりと尻が抑えられて、はね上ったり引張り出されることがないようになっているが、地垂木の方は丸桁位置や途中で止まるものも多く薬王寺塔や観音経寺塔のように、一部を力垂木として四天柱筋まで延ばしているものもある。なお、高蔵寺塔では二重小屋組のところで四方から横材を突き出し、心柱の振れ止めとしている。

以上のように、形式手法が伝統的であっても、内部の構造は近世の手法によっているものがあって、内外とも伝統的な手法を守っているものは少なく、乙宝寺・慈恩寺両塔だけといえる。

(ハ) 多宝塔

多宝塔下重の内部をみると、石堂寺・饅阿寺・楽法寺・最乗寺の四塔では四天柱を立て、那古寺・安洞院両塔では来迎柱としている。石堂寺塔は四天柱の前柱間に虹梁を入れ、背・側面三方は板壁で囲って四天柱内に須弥壇を設けている⁶⁾。

饅阿寺⁷⁾、楽法寺は来迎壁を設けて須弥壇を取付け、最乗寺塔も来迎壁を設け、置仏壇としている。なお、楽法寺塔は四天柱柱頭に飛貫を入れているが、正面だけは虹梁状の竜の丸彫り彫刻としている。那古寺塔は来迎柱に木鼻付の虹梁を組んで三斗をおき、来迎柱と正面側との間に虹梁を架けており、三間仏堂と同じ扱いをしている。安洞院塔は来迎柱が側柱より細く、後方一間通り全体を仏壇とし、前二間には出桁を回して格天井を張っている。これも仏堂の扱いである。仏壇正面三間には虹梁を架け、その下はもととは開放であった⁸⁾。

変っているのは長谷寺塔で、八本の柱を立て、頭貫・台輪を円形に組んで平三斗の組物をおき、須弥壇は八角としている。もちろん、来迎柱は無い。

上重の組上げ構造については、各塔で違った方式がみられる。最も一般的な方式によっているのが饅阿寺塔で、地垂木上の井桁に組

んだ柱盤に上重側柱のうち平柱八本を立て、柱盤上火打に盤をおいて隅柱を立てている。下重の隅木は火打梁に差し止められる。繫肘木も定法どおり組み、側柱間には井桁と隅行に貫（縁繫になる）を通す。側柱のすぐ内方に四天柱を立てているが、これは後補であろう。

長谷寺塔は下重の壁付斗拱間に渡した大梁上柱盤に側平柱を立て、隅柱は下重隅木上の柱盤に立てていて、一二本の側柱を一二角形に配した腰貫で繋ぐ。隅柱の柱盤にはさらに盤を重ねておき、四天柱を転ばせて立て、四隅の手先肘木を支える持送の尻を四天柱へ差し止める。持送の上には四段に井桁を組み、手先肘木の尻をこれに差し止めている。四天柱は上方へ延びており、左義長柱を兼ねているらしい。このように、四天柱と手先肘木尻の組み方は独特の手法である。

石堂寺塔は下重四天柱間に柱盤（下重の垂木掛を兼ねる）を差し立て組み、これと同高に火打の柱盤も組んで、それぞれ平柱・隅柱を立てる。下重の隅木尻は四天柱に差し止めている。側柱は隅柱間に四角形に貫を上下二段に組むだけで、平柱に貫はない。上重には四天柱を立てない。手先肘木尻は通常の繫肘木の納まりとなっている。

楽法寺塔は、上重側柱のうち隅柱四本を下重隅木上に、残りの八

本を下重尾垂上柱盤に立て、腰と台輪の位置には盤を井桁に組んで柱を繋ぐ。下重四天柱の頂には繫肘木を輪雉ぎ込んだ上に盤を井桁に組み、これと上記の腰繋間、腰繋と台輪繋間、台輪繋上の三段に分けてそれぞれ八本、四本、一二本の束を立て、下重の尾垂木・隅木は下段束に、上重手先肘木尻は上段束に差し止めている。他に例をみない、頑丈な組み方である。

最乗寺塔は下重の四天柱が上重へ延びて側隅柱となるが、上重では外側へ片寄せて太さを細めている。平柱は下重の真桁上に渡した盤上に立て、これらの側柱を円形の貫で繋ぐ。大梁上には上重四天柱を通常よりやや外寄りに立てる。下重の手先肘木尻は四天柱へ差し止め、隅木は上重の隅柱と四天柱へ長柄で差し止めている。上重の繫肘木は通常の組み方である。

安洞院塔については、詳細は不明であるが、上重にも四天柱を立て、これに下重隅木を差し止め、側柱には円形の貫を通し、側柱・四天柱間にも貫を通す。繫肘木は通常の組み方であり、在来の上上げ構法に近いようである。

このように、上重の組上げ構法は各塔区々で、同じ方式はみられない。

六、細部の装飾

近世の社寺建築では、彫刻を付け彩色を施した装飾性豊かな遺構が多くみられる。この傾向はとくに関東地方に顕著であり、伝統性の強い塔においても同様である。東北・関東地方の一七塔のうち、岩手県の普門寺三重塔、山形県の安久津八幡宮三重塔、福島県の安洞院多宝塔、茨城県の薬王院・不動院両三重塔、千葉県の新勝寺・観音経寺両三重塔と那古寺多宝塔、神奈川県の最乗寺多宝塔、新潟県の妙宣寺五重塔と長谷寺多宝塔などには彫刻による装飾が付けられ、このうち安洞院・長谷寺両多宝塔、薬王院・不動院・新勝寺各三重塔、それに東照宮五重塔では、全体に極彩色や漆塗が施されている。ここでは、彫刻を付けた一一塔について、少し細かくみてみよう。

まず軸部では、頭貫に木鼻を付けることは禅宗様の一般的な手法であるが、東北地方の安久津八幡宮・安洞院・普門寺三塔では木鼻を象鼻や獅子鼻の丸彫の掛鼻としており、安洞院・普門寺両塔では隅柱だけでなく平柱にも付けている。那古寺塔では側回りにはなく、内部の来迎柱の頭貫に獅子鼻が付く。長谷寺塔は台輪にも木鼻を付ける禅宗様系の手法になるが、頭貫木鼻の先端を竜彫としている。

る点が変わっている。

薬王院・新勝寺・不動院・那古寺各塔では初重の柱や長押、壁板等に幾何学的な連続模様を刻む地紋彫を施している。柱にぐり形文（新勝寺・不動院両塔）、台輪・長押に菱繫文等（新勝寺）、頭貫に菱繫文（薬王院塔）、紗綾形文（那古寺塔）のほか、脇間腰板壁に紗綾形文と草木・鳥獸の浮彫（新勝寺塔）、同じく脇間腰板壁に亀甲繫文と輪宝の浮彫（薬王院塔）などである。地紋彫とは少し違いますが、不動院塔の長押には唐草文を陰刻している。

浮彫を付けたものとしては、薬王院・新勝寺両塔の脇間窓板壁に高肉彫の十六羅漢像、那古寺塔の同じく窓板壁に唐獅子、不動院塔の脇間腰板壁に蓮花のほか、不動院塔の頭貫に肉合彫の草木・鳥獸などがある。また、長谷寺塔では頭貫板に雲文の浮彫り、妙宣寺塔では頭貫に波や唐草の透彫を張付けている。

次に組物をみると、本来は構造材である尾垂木が丸彫の彫刻と化したものが多い。薬王院・新勝寺・不動院・普門寺（二重）・観音経寺の各三重塔、長谷寺・那古寺・最乗寺の各多宝塔の上重では尾垂木の先を竜頭（新勝寺・薬王院両塔の三重は象か獏）としており、このうち、少なくとも薬王院・新勝寺・観音経寺の三塔は竜頭が別木で造られ、込栓で止めているのが認められる。⁹⁾ 不動院塔では平の竜頭はよく分らないが、隅は尾垂木から造り出されている。長谷

寺塔は上重の二段になる尾垂木のうち上段の平だけ竜頭で、これは手先肘木から造り出されている。最乗寺塔は上重の二段の尾垂木のうち、上段が雲、下段が竜頭で、両方とも別木で造られ、込栓で止められている。このように、彫刻化した尾垂木は別木を取付けるとのと、造り出したものがある。

軒支輪を厚板とし、これに浮彫を付けるものも多い。雲文・雲波文を刻む不動院・安久津八幡宮・観音寺各三重塔と長谷寺・安洞院・最乗寺（上重）各多宝塔、菊水文を刻む最乗寺塔（下重）などがある。那古寺塔下重では菱繫花文の地紋彫を刻んでいる。さらに、不動院塔では軒天井にも雲波・草木等の浮彫を付けている。

また、斗栱間の琵琶板に彫刻を入れるものも多い。薬王院塔（初重）・新勝寺塔（二重・三重）・長谷寺塔（上重）・不動院塔・観音経寺塔・最乗寺塔（上重）では草木・鳥獸・雲水等を、新勝寺（初重）では中国故事の人物をそれぞれ高肉彫としている。長谷寺塔（下重）では花鳥等を透彫としている。これらの彫刻は別木で造り、琵琶板の外面に取付けるのが普通であるが、不動院塔のように彫刻そのものを琵琶板として嵌め込むものもある。

組物ではほかに、拳鼻を彫刻化したものがある。那古寺塔は下重拳鼻を獅子（下段）と竜（上段）の二段、二手先肘木の鼻を獅子とし、最乗寺塔上重では拳鼻を鳥（鳳凰か）、普門寺塔（初重）では隅

行手先肘木の鼻を象鼻としている。また、那古寺塔では、下重軒天井に四面で異なる地紋彫を施している。

軒廻りでは、垂木ではなく厚板の板軒として、これに浮彫を施したものがあつた。新勝寺塔・普門寺塔・安洞院塔の三塔で、新勝寺・安洞院両塔は各重とも二軒の板軒であるが、普門院塔は初重を二軒平行垂木、三重を二軒扇垂木とし、二重のみ一軒の板軒としている。新勝寺塔は雲波文を、普門寺塔は雲波文に加え輪宝を各面に一個ずつ刻む。安洞院塔は雲文を刻むが、下重では正面に軒唐破風を設け、上重では雲文に天女を加えている。このほか、長谷寺塔では上重の隅木に雲文の浮彫を付けている。

中世以前の塔では、彫刻による装飾は蓐股と隅木下持送に限られたが、近世の東北・関東地方の塔では、上記のように彫刻を豊富に付けた塔があり、とくに茨城・千葉地方に多い。同じ大工が建てた薬王院塔と新勝寺塔を比べてみると、七年あとの新勝寺塔の方が彫刻の量が多いし、同じ大工が建てたのかもしれない安久津八幡宮塔と安洞院塔を見比べても、一四年あとの安洞院塔の方が彫刻化が進んでいる。このような塔の遺構は他の地方にもあるが、数は少なく、彫刻の量で東北・関東地方の遺構に匹敵するものは、徳島県の熊谷寺多宝塔だけである。

注

- 1 他府県から移築された塔及び不完全な塔は除く。
- 2 東京都には、本門寺・旧寛永寺両五重塔のほかに、浅草寺五重塔（慶安元年建立、昭和二十年焼失）と感応寺五重塔（寛政三年建立、昭和三十二年焼失）があつた。
- 3 桃山時代、江戸時代初期・中期・後期・末期の年代区分は文化庁建造物課方式による。（『国宝・重要文化財指定建造物目録』参照）
- 4 法華経寺塔の五重小屋組には平行垂木の痕跡をもつ旧茅葺が残されているから、もとは五重も平行垂木であつたと思われる。
- 5 本門寺塔は初重が元禄十五年に改修されており、あるいは初重も二重以上と同じく禅宗様であつたかもしれない。
- 6 ただし、蓐股は古いようである。
- 6 石堂寺塔は、現在は四天柱間に正面棧唐戸、側面板戸引違としているが、正面は虹梁下の長押を枕捌きとし、側面は柱に板溝がある。
- 7 鏝阿寺塔は、須弥壇上に厨子を安置し、背面は来迎壁の中ほどを仏龕状に造り、仏像を祀っている。
- 8 安洞院塔は、現在は仏壇正面の中央間に棧唐戸を建て、両脇間に火灯窓付板壁を嵌めている。
- 9 観音経寺塔では、三重全体と二重の一部に尾垂木が取付けられておらず、手先肘木が先端を切り落とし、込栓の穴をあけたままになっている。

表-1 東北・関東地方の近世仏塔

(1) 五重塔

(寸法 単位: 尺)

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	重別	総間 (S)		中央間			脇の間			通減		軸部高
						寸法	枝	寸法	枝	1枝寸法	寸法	枝	1枝寸法	寸法	率	
1 ※1	最勝院	青森県弘前市 銅屋町	寛文6 (1666) 〔伏鉢刻銘〕		初	18.92	44	6.88	16	0.43	6.02	14	0.43	2.58	1.0	7.74 (0.41S ₁)
					二	16.34	38	6.02	14	〃	5.16	12	〃			
					三	14.52	34	5.16	12	〃	4.68	11	〃			
					四	11.18	26	4.30	10	〃	3.44	8	〃			
					五	9.46	22	3.44	8	〃	3.01	7	〃	1.72	0.5	4.22
2 ※2	東照宮	栃木県日光市 山内	文政元 (1818) 〔銅棟札〕ほか	大工江戸神田 大久保喜平治	初	16.00	32	6.00	12	0.50	5.00	10	0.50	1.50	1.0	8.50 (0.53S ₁)
					二	14.50	29	5.50	11	〃	4.50	9	〃			
					三	13.00	26	5.00	10	〃	4.00	8	〃			
					四	11.50	23	4.50	9	〃	3.50	7	〃			
					五	10.00	(20)	4.00	(8)	(〃)	3.00	(6)	(〃)	〃	0.625	3.69
3	法華経寺	千葉県市川市 中山町	元和8 (1622) 〔露盤刻銘〕		初	16.095	37	5.655	13	0.435	5.22	12	0.435	1.305	1.0	9.04 (0.56S ₁)
					二	14.79	34	5.22	12	〃	4.785	11	〃			
					三	13.485	31	4.785	11	〃	4.35	10	〃			
					四	12.18	28	4.35	10	〃	3.915	9	〃			
					五	10.875	(25)	3.915	(9)	(〃)	3.48	(8)	(〃)	〃	0.675	3.315
4	本門寺	東京都大田区	慶長12 (1607)	御大工鈴木近	初	15.99	37	5.63	13	0.43	5.18	12	0.43	1.24	1.0	
					二	14.75	(34)	5.21	(12)	(〃)	4.77	(11)	(〃)			
					三	13.45	(31)	4.81	(11)	(〃)	4.32	(10)	(〃)	1.30		
														1.29		

※2		池上	〔伏鉢刻銘〕	江守長次	四	12.16	(28)	4.30	(10)	(〃)	3.93	(9)	(〃)	1.36	0.675	
					五	10.80	(25)	3.90	(9)	(〃)	3.45	(8)	(〃)			
5	旧寛永寺	東京都台東区 上野公園	寛永16(1639) 〔伏鉢刻銘〕	大工甲良豊後 守四位宗七・ 棟梁甲良左吉 藤原宗久・椎 名兵庫	初	15.98	34	5.64	12	0.47	5.17	11	0.47	1.41	1.0	7.97 (0.50 S ₁)
					二	14.57	31	5.17	11	〃	4.70	10	〃			
					三	13.16	28	4.70	10	〃	4.23	9	〃			
					四	11.75	25	4.23	9	〃	3.76	8	〃			
					五	10.34	22	3.76	8	〃	3.29	7	〃			
6	妙宣寺	新潟県佐渡郡 真野町阿仏坊	文政8(1825) 〔棟札写〕	棟梁相川茂三 右衛門	初	11.55	32	4.33	12	0.361	3.61	10	0.361	0.74	1.0	6.43 (0.56 S ₁)
					二	10.81	30	4.33	12	〃	3.24	9	0.405			
					三	10.45	29	3.97	11	〃	3.24	9	〃			
					四	9.01	25	3.24	9	0.405	2.885	8	0.361			
					五	7.925	(22)	2.885	(8)	(0.361)	2.52	(7)	(〃)			
	感応寺 古図	東京都台東区谷 中	寛政3(1791)		初	18.00	34	6.36	12	0.53	5.82	11	0.53	1.06	1.0	9.0 (0.5 S ₁)
					二	16.96	32	6.36	12	〃	5.30	10	〃			
					三	15.37	29	5.83	11	〃	4.77	9	〃			
					四	13.78	26	5.30	10	〃	4.24	8	〃			
					五	12.19	(23)	4.77	(9)	〃	3.71	(7)	〃			

注 ※1については文化庁所蔵図面、※2については修理工事報告書によった。

(2) 三重塔

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	重別	総間(S)		中央間			脇の間			通減		軸部高
						寸法	枝	寸法	枝	1枝寸法	寸法	枝	1枝寸法	寸法	率	
1	普門寺	岩手県陸前高田市米崎町地竹沢	文化6(1809) 〔棟札〕		初二三	5.40	22 板 扇	2.46	10	0.246	1.47	6	0.245			5.07 (0.94S ₁)
2	日吉八幡神社	秋田市八幡	宝永4(1707) 〔心柱盤墨書〕	棟梁吉田安左衛門・塚本与一郎・松本〇	初二	10.24	32	3.84	12	0.32	3.20	10	0.32	1.92	1.0	6.485 (0.63S ₁)
					二	8.32	26	3.20	10	"	2.56	8	"	"		
					三	6.40	(20)	2.56	(8)	"	1.92	(6)	"	"	0.625	
3	安久津八幡宮	山形県東置賜郡高畠町安久津	寛政7(1795) 〔丸桁墨書〕	大工棟梁伊達鳥取邑山口右源司	初二	15.36	32	5.76	12	0.48	4.80	10	0.48	1.92	1.0	8.12 (0.53S ₁) 4.45
					二	13.44	28	4.80	10	"	4.32	9	"	2.88		
					三	10.56	(22)	3.84	(8)	"	3.36	(7)	"		0.69	
4	慈恩寺	山形県寒河江市慈恩寺	文政11(1828) 〔棟札〕	匠長当山布川豊真 木挽棟梁当山志田小太郎	初二	16.90	32	6.34	12	0.528	5.28	10	0.528	1.59	1.0	9.925 (0.59S ₁) 5.25
					二	15.31	29	5.81	11	"	4.75	9	"	"		
					三	13.72	26	5.28	10	"	4.22	8	"	"	0.81	
5	隠津島神社	福島県安達郡東和町木幡治家	延宝2(1674) 改修 〔記録〕		初二	12.16	32	4.56	12	0.38	3.80	10	0.38	1.52	1.0	8.01 (0.66S ₁) 4.32
					二	10.64	28	3.80	10	"	3.42	9	"	1.14		
					三	9.50	25	3.42	9	"	3.04	8	"		0.78	
6	法用寺	福島県大沼郡会津高田町雀林	明和5(1768) 〔板絵図〕	大工棟梁当国山次衛門・越〇仙七	初二	13.44	32	5.04	12	0.42	4.20	10	0.42	1.68	1.0	8.52 (0.63S ₁) 4.085
					二	11.76	28	4.20	10	"	3.78	9	"	1.89		
					三	9.87	(23.5)	3.57	(8.5)	"	3.15	(7.5)	"		0.73	

7	高蔵寺	福島県いわき市 高倉町鶴巻	安永3(1774) 〔伏鉢刻銘〕		初 二 三	12.40 10.54 8.68	40 34 28	4.96 3.72 3.10	16 12 10	0.31 " "	3.72 3.41 2.79	12 11 9	0.31 " "	1.86 " "	1.0 0.70	8.835 (0.71S ₁)
8	薬王院	茨城県真壁郡 真壁町椎尾	宝永元(1704) 〔心柱墨書〕	大工桜井瀬左 衛門安信	初 二 三	15.09 13.475 11.86	28 25 22	6.47 4.855 4.31	12 9 8	0.539 " "	4.31 4.31 3.775	8 8 7	0.539 " "	1.615 1.615	1.0 0.786	9.335 (0.62S ₁) 4.25 4.25
9	不動院	茨城県筑波郡 伊奈村板橋	安永8(1779) 〔縁腰組墨書〕		初 二 三	13.96 12.85 11.56	32 30 27	6.12 5.02 4.60	14 12 11	0.438 0.418 "	3.92 3.915 3.48	9 9 8	0.436 0.435 "	1.11 1.29	1.0 0.83	9.04 (0.645S ₁) 3.88 3.87
10	旧四本竜 寺	栃木県日光市 山内	正徳3(1713) 〔記録〕		初 二 三	18.05 15.15 12.35	38 32 26	6.65 5.65 4.75	14 12 10	0.475 0.47 0.475	5.70 4.75 3.80	12 10 8	0.475 " "		1.0 0.684	9.12 (0.50S ₁) 3.69 3.44
11	高勝寺	栃木県下都賀 郡岩舟町静	寛延4(1751) 〔露盤刻銘〕	塔大工大山平 六	初 二 三	13.44 10.92 9.24	32 26 22	5.04 4.20 3.36	12 10 8	0.42 " "	4.20 3.36 2.94	10 8 7	0.42 " "	2.52 1.68	1.0 0.688	7.595 (0.565S ₁) 3.425 3.215
12	新勝寺	千葉県成田市 成田	正徳2(1712) 〔心柱墨書〕	大工棟梁桜井 瀬左衛門、彫 物師円哲無関	初 二 三	14.14 12.625 11.11	28 25 22	6.06 4.545 4.04	12 9 8	0.505 " "	4.04 4.04 3.535	8 8 7	0.505 " "	1.515 "	1.0 0.786	9.00 (0.635S ₁) 4.12 4.12
13	観音経寺	千葉県山武郡 芝山町芝山	天保7(1836) 〔伏鉢刻銘〕	棟梁清宮吉兵 衛	初 二 三	15.20 13.775 12.35	32 29 (26)	5.70 5.225 4.75	12 11 (10)	0.475 " "	4.75 4.275 3.80	10 9 (8)	0.475 " "	1.425 "	1.0 0.81	8.48 (0.56S ₁) 3.68 3.73

14	安 案 寺	埼玉県比企郡 吉見町御所	江戸時代初期		初	14.22	26	5.47	10	0.547	4.375	8	0.547	1.64	1.0	9.10 (0.64S1)
					二	12.58	23	4.92	9	〃	3.83	7	〃	1.64		
					三	10.94	20	4.38	8	〃	3.28	6	〃	0.79		
15	西 福 寺	埼玉県川口市 西立野	元禄6(1693) 〔棟札〕	大工内木市兵衛	初	14.66	32	5.50	12	0.458	4.58	10	0.458	2.75	1.0	
					二	11.91	26	4.58	10	〃	3.665	8	〃	2.75		
					三	9.16	20	3.66	8	〃	2.75	6	〃	0.625		
16	成 就 院	埼玉県行田市 長野	享保14(1729) 〔棟札〕		初	7.40									1.0	
					二	6.24										
					三	5.08								0.685		
17 ※	乙 宝 寺	新潟県北蒲原 郡中条町乙	元和6(1626) 〔棟札〕	大工京都小嶋 近江守藤原吉 正	初	14.118	26	5.43	10	0.543	4.344	8	0.543	1.63	1.0	8.60 (0.61S1)
					二	12.488	23	4.886	9	〃	3.801	7	〃	1.628		
					三	10.86	20	4.344	8	〃	3.258	6	〃	0.77		
	円 藏 寺 板 絵 図	福島県河沼郡 柳津町柳津	文政頃		初	17.6	32	6.6	12	0.55	5.5	10	0.55	2.2	1.0	10.6 (0.60S1) 4.85
					二	15.4	28	5.5	10	〃	4.95	9	〃	3.3		
					三	12.1	(22)	4.4	(8)	〃	3.85	(7)	〃	0.69		

注 ※については、文化庁所蔵図面によった。

(3) 多宝塔

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	下重柱間(S)				上重径	下重軸部高	下重			上重	
					総間	中央間	脇の間	1枝寸法			柱	組物	軒	組物	軒
1	安洞院	福島県福島市 山口	文化9(1812) 〔寺伝〕	大工藤原右源次	9.79 (34枝)	4.61 (16枝)	2.59 (9枝)	板軒 (0.288)		8.355 (0.85S)	円	三手先	二軒板	三手先	二軒板
2	楽法寺	茨城県真壁郡 大和村本木	嘉永6(1853) 〔棟札〕	大工棟梁柴山 播磨正始治	20.97 40枝	8.39 16枝	6.29 12枝	0.524	13.9 (0.66S)	11.40 (0.54S)	円	三手先	二軒平行	三手先	二軒扇
3 ※1	鍬阿寺	栃木県足利市 家富町	享和3(1803) 〔擬宝珠刻銘〕		23.00 46枝	9.00 18枝	7.00 14枝	0.50	11.9 (0.52S)	8.97 (0.39S)	円	出組	二軒平行	四手先	二軒扇
4 ※2	石堂寺	千葉県安房郡 丸山町石堂	江戸時代中期		13.66 40枝	5.46 16枝	4.10 12枝	0.341	5.64 (0.41S)		方	出組	二軒平行	四手先	二軒平行
5	那古寺	千葉県館山市 那古	宝暦11(1761) 〔心柱墨書〕	棟梁大工上野庄 右衛門他	12.98 40枝	5.20 16枝	3.89 12枝	0.324	6.80 (0.52S)		方	二手先	二軒平行	四手先	二軒平行
6	最乗寺	神奈川県南足 柄市関本	文久3(1863) 〔心柱墨書〕	棟梁相模匠藤原 直行林嘉右衛 門、彫工後藤豊 次郎	16.37 40枝	6.55 16枝	4.91 12枝	0.409	8.59 (0.525S)	9.00 (0.55S)	円	二手先	二軒平行	四手先	二軒扇
7	長谷寺	新潟県佐渡郡 畑野町長谷	延享4(1747) 〔棟札〕	大工間金介・小 田民部	20.10 56枝	7.18 20枝	6.46 18枝	0.539		9.065 (0.45S)	円	二手先	二軒平行	三手先	二軒扇

注 ※1については、元禄5年(1692)の建立とも伝えられるが、細部手法からみると江戸時代後・末期とする方がよい。また、※2については相輪露盤に天文14年(1645)の刻銘があるが、室町時代の前身塔の部材を一部再利用して、江戸時代に再建したとみるべきであろう。

(4) 宝 塔

番 号	名 称	所 在 地	建 立 年 代	工 匠 名	下 階			上階径	組 物	軒	備 考
					総 間	中央間	脇 間				
1	本 門 寺	東京都大田区池上	文政11(1828) 〔棟札〕	工匠池上山本新 七藤原信盛・山 本卯之助藤原清 仲	17.0	7.0	5.0	10.0	三手先	二軒扇	下階、側柱8本・四天柱 上階、側柱12本・四天柱

注 修理工事報告書によった。

表-2 各部の様式

名 称	重 別	軸 部	組 物	軒
本 門 寺 五 重 塔	初 二~五	和 様 禪 宗 様	和 様 禪 宗 様	和 様 禪 宗 様
法華経寺五重塔	全	和 様	和 様	和 様
旧寛永寺五重塔	"	"	"	"
最勝院五重塔	"	"	和様、一手通肘木	"
東照宮五重塔	初~四 五	" "	和 様 禪 宗 様	" 禪 宗 様
妙宣寺五重塔	初 二~四 五	" " "	和様、一手通肘木 和 様 "	和 様 " 禪 宗 様
旧感応寺五重塔	初~四 五	" "	" 和様、尾垂木2段	和 様 禪 宗 様
乙宝寺三重塔	全	"	和 様	和 様
安楽寺三重塔	"	"	"	"
隠津島神社三重塔	"	"	"	"
西福寺三重塔	"	"	"	"
薬王院三重塔	"	"	"	"
日吉八幡神社三重塔	初・二 三	禪宗様、長押 "	禪宗様、葦股 禪 宗 様	" 禪 宗 様
新勝寺三重塔	全	和 様	和 様	(板 軒)
旧四本竜寺三重塔	"	"	"	和 様
高勝寺三重塔	初・二 三	" "	" "	" 禪 宗 様
成就院三重塔	全	"		和様(吹寄)
法用寺三重塔	初・二 三	" "	和様、尾垂木2段 "	和 様 禪 宗 様
高蔵寺三重塔	全	和 様(長押なし)	和様、一手長肘木	和 様

不動院三重塔	全	和 様	和 様	和 様
安久津八幡宮三重塔	初・二 三	" "	" "	" 禪 宗 様
普門寺三重塔	初・二 三	禪 宗 様、長 押 " "	(特 殊) 禪 宗 様、葦 股 "	和 様 板 軒 禪 宗 様
慈恩寺三重塔	全	和 様	和 様	和 様
観音経寺三重塔	初・二 三	" "	和様、尾垂木2段 "	" 禪 宗 様
円蔵寺三重塔	初・二 三	" "	" "	和 様 禪 宗 様
石堂寺多宝塔	全	"	和 様	和 様
長谷寺多宝塔	下 上	禪 宗 様、長 押 "	禪 宗 様、詰 組 禪 宗 様	" 禪 宗 様
那古寺多宝塔	全	和 様	和 様	和 様
鏝阿寺多宝塔	下 上	" "	" "	" 禪 宗 様
安洞院多宝塔	下 上	" "	" 和様、尾垂木2段	(板 軒) "
楽法寺多宝塔	全	"	和 様	和 様
最乗寺多宝塔	下 上	" "	禪 宗 様、葦 股 禪 宗 様	" 禪 宗 様

資料

一、最勝院五重塔

〔伏鉢銘〕文化庁「指定説明」による

連光山大内寺京海上人

寄進前土佐大守信實

当本願七世建立当海上人

奉加越中守信政公

寛文六年□

五月大吉□日

画吉田庄治

二、東照宮五重塔

〔銅棟札〕『修理工事報告書』による

先是慶安元年戊子四月十七日正當

東照宮三十三回御忌忠勝辱奉

鈞命監護法華八講大齋会無故障被遂行訖於是申蒙

命表其微忱當此高顯

上棟 日光山 東照宮 宝塔

慶安三年庚寅四月十七日

若狭国主從四位上左近少將兼讀岐守源姓酒井氏

忠勝創建

文化十二年乙亥十月十六日故宝塔回祿

文政元年戊寅九月十七日

若狭国主從四位下侍從若狭守源姓酒井氏

忠進再建

〔小屋材墨書〕『修理工事報告書』による

大工棟梁

江戸神田多町老丁目

大久保喜平治藤原延治納

于時文化十四歲丁丑十月廿二日

三、法華経寺五重塔

〔露盤銘〕

〔宝珠銘〕

御為光徳日元

同妙光日経

別奉此一盖施入

本阿弥光室

膝下

奥村長衛門

元和八七六日

元和八壬戌拾月吉日

紀劬那賀郡

根来坂本住

藤原朝臣

田村友次

越劬北庄東岡町住

小国孫兵衛正家

四、本門寺五重塔

〔伏鉢銘〕『修理工事報告書』による

両山第十三世比丘日詔謹

日本東関八ヶ国之内武州

池上長栄山本門寺五級之

層塔九輪之夏

御建立檀主征夷大將軍

源秀忠朝臣之御局戒号

正心院日幸欽而勉之焉

御奉行青山伯耆守忠俊手代 安藤清兵衛吉久

伊藤六右衛門定勝

五、旧寛永寺五重塔

〔伏鉢銘〕

御大 棟梁 鈴木□□□□ (削跡あり)
御大工鈴木近江守長次
鋳物師御大工推名^{〔名圖勘南次〕} (削跡あり)
土佐守吉次
維時慶長第拾二竜集^{丁曆仲秋下辭第一}賞誌旃

奉建立五重塔老基

土井大炊頭四位侍從藤原利勝

奉行大野市左衛門重年

酒墨兵左衛門重定

高田□左衛門定里

大工甲良豊後守四位宗広

棟梁甲良左吉藤原宗久

椎名兵庫

寛永拾六年己卯歳林鐘吉日

寛永拾六年己卯七月十七日

御大工 椎名兵庫頭吉純

六、普門寺三重塔

〔棟札〕

文化六歳次己巳 則吉旦海岸山補陀峯□□ 普門禪寺

天下泰平 国家安全 信心施主等存者福寿無量

奉造立三級宝塔伏祈 山門繁昌火盜專□□

風雨和順五穀豐饒 子孫昌盛家□□

七、日吉八幡神社三重塔

〔心柱々盤墨書〕

〔北面〕宝永四丁亥歳五月吉日 大願主 青木平□ (花押)

吉田安右衛門□ 若狭屋彌兵衛 渡辺長九郎 文林陶兵衛 安藤平七

〔南面〕棟梁 塚本与一郎□ 固田又十郎 今三郎兵衛 小川伝兵衛 番匠合十一人

松本□ 同□ 塚元久兵衛 田名辺十兵衛

〔擬宝珠銘〕

羽笏秋田久保田

谷橋村

三重大宝塔

擬法珠

施主帶屋

清房

宝永四年

丁亥

九月日

八、安久津八幡宮三重塔

〔丸桁墨書〕

維時寛政七乙卯九月吉祥日 大工棟梁伊達爲取島山口右源司 脇弟同苗豊吾

九、慈恩寺三重塔

〔棟札〕

岡象女神 文政十一戊子天 当山
匠長 布川豊真吉田村 渡部甚蔵 中郷村 当山 ヤマ 武介 豊沢村 勘次郎 陳ヶ峯山 山形 文助 天童 藤助 大石田村 柴田善治
当山 トウザン 藤介新田 谷地 同所 吉蔵 大久保 西所村 観音寺村 藤介新田
茂木外記 吉太郎 宇助 嘉七 吉蔵 弥之助 甚介 藤吉 宇吉
奉 上 棟 大 元 尊 神 三 重 塔 長 久 栄 昌 守 護 所 小 板 師 谷 池 吉 蔵 謹 言 鹿嶋村 山形 三太郎 政之助
西里村 藤介 西所村 日和田村 山形 同 小四郎 藤七
五帝竜神 十一月吉祥日 木挽梁 志田小太郎 左藤利兵衛 吉左衛門 藤四郎 代吉 藤介 喜作 清八 喜介 山形 同 小四郎 藤七
当山 同山 又蔵 文蔵 和吉 駒吉 子キツ 政吉 陳ヶ峯 同所村 鍛冶 谷地 五郎七 利助

十三、新勝寺三重塔

〔心柱墨書〕『修理工事報告書』による

一切日皆善一切宿皆賢諸仏皆威德羅皆行滿以斯誠実言願我常吉祥
南閭浮州大日本国下総州埴生郡成田山金剛王院神護新勝寺中興
聖主天中天 迦陵頻伽声 宝塔願主現住法師印照範 竜共造立之
（ア） 奉新造立三重五智宝塔一其為 国家安穩殊有縁繼白故也
（キ） 哀愍衆生者 我等今敬礼
（リ） 皆正徳二壬辰載三月大吉祥日
（ク） 自宝永六己丑年十月二日細工始宝永八辛卯年十月十日棟上

常州郡賀郡羽黒村 大工棟梁 桜井瀬左衛門
同国同郡 次棟梁 中野左五兵衛
正徳二壬辰年三月十日 同国茨城郡笠間 藤田孫平次
入仏供養三十日間 下総国武射郡堺村 伊藤金右衛門
若未法世人 長誦此真言 江戸 住 刀兵不能害 本火木難漂 彫物師 円鉄無閑
（以下消滅）

十、高蔵寺三重塔

〔伏鉢銘〕 いわき市教委鈴木氏の御教示による

当山先住十七世
自力造立大願主

小山田村

閑居

承隆

一切世話人

米倉村

弟子

閑居

英隆

安永三甲午歳

七月大穀旦

鋳物師

長子村

小野兵重

本高

抽唯一懇念造立意

趣者金輪聖皇天朝

地久国内安寧万民

豊楽三國伝燈顯密

祖師当寺開山代々先

師貴賤靈等皆成仏道

院内安穩紹隆密教郷

内安固諸衆和合心中諸

願安定成并塵刹沙界

平等拔済敬白

十一、薬王院三重塔

〔心柱墨書〕

本願当山学頭卅八代中興本孝法印願主同卅九代 往昔本孝発本堂建立之於大願時於堂内企法華万部
第子尊孝建助願良恵法印

大工当国茨城郡羽黒桜井瀬左衛門安信

之誦誦 謹

主読訓十部

得方金拾両以五両造立中谷小院

以五両宛宝塔建立之元金不幸而

落命之日呼請眞壁新宿町佐藤三

郎兵衛大嶋村鈴木瀬兵衛

郎令為我沒後造塔之一助向父肯

落落十有余年彼金既二十四兩

造塔為元金終以勸村落六年而

年甲申天十月自十三日至十七日

本尊入仏并十万人講帳奉納牌

入塔日光御衆人十二口依一品公

弁親王之命伶人装束而音楽供養

同自十八日至廿二日自宗他宗不撰

僧俗仕

伏冀結縁之僧俗男女自他同

法華誦誦供養

以下消滅

正日

十二、高勝寺三重塔

〔露盤銘〕

(北面) 下野国都賀郡鷲巢村

大願主性智園蓮大徳同国安蘇郡

元國町助力院覚山唯信寺陰居唯願

令建立者也 江戸神田鍋町大工

小幡仁左衛門

(東面) 塔大工 下野国駒場村

時千寛延辛未季三月大吉祥日

大山平六

(南面) 下野国安蘇郡

内田甚左衛門

尾崎太郎兵衛

右文兩人岩舟山塔建立

大 仕

十四、観音数寺三重塔

〔伏鉢銘〕『修理工事報告書』による

(右面) 山中住

棟梁 清宮 吉兵衛

□ □ 勘藏

(正面) 当村住 □ □

仕事仕 五木田 仙藏

兼吉 吉

小柳 常吉

山中 鈴木 喜七

(背面) 于時

天保七寛舍丙申祀

首夏上旬五日棟祭

江戸小伝馬住

銅師 牧嶋 弥五兵衛

良直

十六、成就寺三重塔

〔棟札〕『修理工事報告書』による

享保十四己酉年 隠居法有年七拾七歳

(表) 忍領長野村成就院

建立之

利兵衛

(裏) 大工棟梁

八兵衛

彦左衛門

清八 権兵衛

喜兵衛 惣七

小兵衛 安左衛門

平助

江戸神田住 鋳物師 粉川 市正

村田 吉兵衛

(正面より左面にかけて)

上総州武射郡芝山村 天応山福聚院観音寺

奉造立九輪一基

当院第四十六世住 法印思惟湛定

当村

大願主 五木田 治良兵衛

五木田 治良左門

五木田 源五兵衛

万人講勸化

施主面々

願以此功德

普及於一切

我等与衆生

皆共成仏道

十五、西福寺三重塔

〔棟札写〕『修理工事報告書』による

元禄六癸酉年

聖主天中天迦陵頻伽声

願主立野村西福寺現住法印

鏡胤 奉造立三身如来三重宝塔願以此功德普及於一切我等与衆生皆共成仏道

三月二十七日

地頭 伊奈半十良殿

造塔一基勸進状

夫西国坂東秩父百処之観音者靈驗新而參詣之 輩得現世後生之利益無難然國遠境界遙而老若 男女無縁人多之且為是於立野村西福寺去三月 奉勸請百勸音所十方婦依諸人隨喜參詣細 素至于今不隨者也蓋以大悲心現有緣取方 便平然散銅數積填造塔之回由更請諸衆或 志先祖菩提提或期子孫繁昌所施之米錢不思 多小唯以信心清淨令勸進結縁紛若然宝塔起 音開眼供養時受廻向功德者憑現當二世仍 而勸進如件

本尊施主毗盧舍那仏 尾州御室千代姫様 盧舍那如来竜泉寺法印

尊自作 釈迦牟尼仏牛込南蔵院

法印 鏡胤

供養導師 三月廿二日新井宿村 宝蔵寺

大工武勘江戸牛込水道町 内木市兵衛

五十歳立之

〔露盤銘〕『修理工事報告書』による

下野国佐野 鋳物師 野村宗右衛門信次

元禄五天申歲 霜月吉祥日

十七、乙宝寺三重塔

〔棟札〕 文化庁「指定説明」による

元和五己未季 守護堀丹後守源朝臣直寄 老名堀主膳正忠重 給人堀彦太夫

〔表〕 (アーキ) 奉造立塔一字本願西国対馬志多留村阿昆留末子湯殿一廿行天入上人

九月四日

乙宝寺中興江初高嶋桂田末子佐初直光寺末第文精房政意法印

大工京都小嶋近江守藤原朝臣吉正 肝煎江初住小嶋三四郎正久吉野
棟梁仁助同竹内左兵衛吉重 肝煎乙大工本間李助実重子息拾三忠木工左衛門絶家
九輪大工列羽郡大窪村新兵衛家次 鍛冶猪助 賦船大学長慈口入
肝煎行人衆正蔵院西海宗海玄海南海本海免心忠海奉行勘左衛門尉善久
順海竜海輪海八海養海正海伝海海上入入海善海上海慶海運海海海
寺中妙法院有全福福寺枝俊吉祥坊清遍明星坊尊慶本坊尊慶(同前)

〔裏〕

塔建立始慶長十九年五月廿一日村上周防守代立始元和六年申如月十七日堀丹後守

菅田村理右衛門源右衛門金石衛門 諸普請肝也
代建納則焉供養法華一千部誦誦畢千部人数百四十箇
黒河住江本清兵衛千部諸陪役人也

十八、樂法寺多宝塔

〔棟札〕

聖主天中天 大梵天王 嘉永六歲次癸丑三月廿有八日
迦陵頻伽声 金輪聖主宝祚長遠百穀豐饒平土泰平

〔表〕 (バン)

奉建立多宝塔老宇

大樹殿下武運永久子孫果葉国安穩

哀愍衆生者 帝釋天王 我等今敬礼

雨引山別当樂法寺 法印元盛 二十四世
二十六世 現住暢光

越後国

三嶋郡上川根邑

木工

友蔵

日偏頭虎吉

〔裏〕 (ポローン)

十法檀那

小田部河内大像

藤原益

小田部庄五郎

成徳

木羽真師弥七

各願成就

普請方鑑事 智田 飯島右門和義
真良 洪尾庄右工門清亮

資 料

十九、饒阿寺多宝塔

〔擬宝珠銘〕

享和元西七月七日

淨勸童子

享和三年

亥四月吉日

当所二丁目

大山兵左エ門恭茂

二十、那古寺多宝塔

〔心柱墨書〕『修理工事報告書』による

夫当山七堂之随一多宝塔者往昔從草創幾經年 破零亦有年矣予雖欲再創此粧靈場自他之寿福有□□年也時哉当郷
伊勢屋甚衛翁予與合力仰縑素之芳助積寸鉄尺木功既成□ 剩以其余力本尊五仏修補了是歳□□□□六月先師
金剛山第廿九世頼意和上並浄侶教屋之希秘密陀羅尼之法筵 仰乞一天下泰平御武運永久施入道俗自他法界平等利益
宝曆十一年己歳六月吉日修之

役僧西之坊 頼 範

府中 上野庄右エ門

府中 金子平助 当所 加藤和吉

船形村 鈴木吉助

万人溝願主 伊勢屋甚右門 棟梁大工

同 徳右エ門

那古東 加藤清兵衛

当所 加藤新治郎

当所東 加藤平内

沓見村 外問源兵衛 小柴久七 木挽

平久里中村 小沢庄兵衛

(以下略)

二十一、最乗寺多宝塔

〔心柱墨書〕

造宮御掛庵穩寺蘭明和尚御代

木坊補席兼直歲保国寺仙洲〔花押〕

奉経宮宝塔一基所冀皇國鞏固

寄語宋無忌火光速入地

功德主 某侯大奥

国土昇平大檀那身宮安泰福寿

塔有壬癸神日猷四海水

願主江戸音羽高橋清五郎藤原道子

綿延山門鎮靜吉祥如意

維昔文久三星次舍癸亥九月落成

天王院宝禪
後見兼直歳
大松寺貞山

棟梁
相模匠藤原直行
藤沢宿林嘉右衛門
鎌倉世話幸吉
江戸彫工後藤豊次郎

二十二、長谷寺多宝塔

〔棟札〕

〔アク〕

金輪聖皇 天長地久 当□繁昌寺□□人法繁榮広作仏事 大工間 金介
十方旦那 □願及四法界平等利益 小田民部

〔表〕

〔パン〕

聖主天中天迦陵頻伽□□護梵釋四王諸護法等□□八葉祖師

奉再宮五間面五智堂□□老字為先師法印頓証仏果且者長秀滅罪生善密教□□証也

哀愍衆生者我等今敬礼十六□□三十七尊摩利聖衆教令輪者五大忿怒外金剛部廿天

〔一〕

〔タラーク〕

天下泰平 國家豊楽 延享四丁卯年三月廿一日日本願沙門前豊山住持法印長秀敬白

〔裏〕

本願長秀俗姓者新穗備前守〔男本間茂左衛門
之弟〕息也



薬王院三重塔（初重）



新勝寺三重塔（初重）



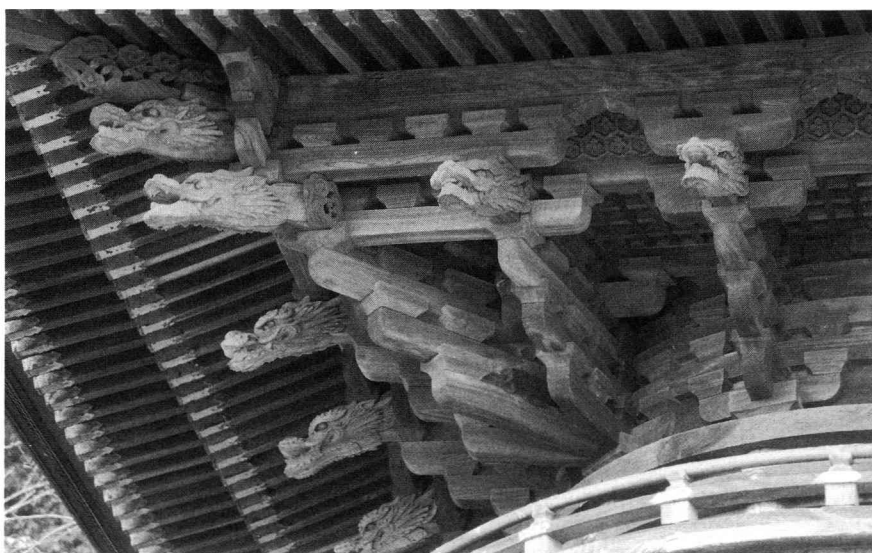
長谷寺多宝塔（下重）



長谷寺多宝塔（上重）



那古寺多宝塔（下重）



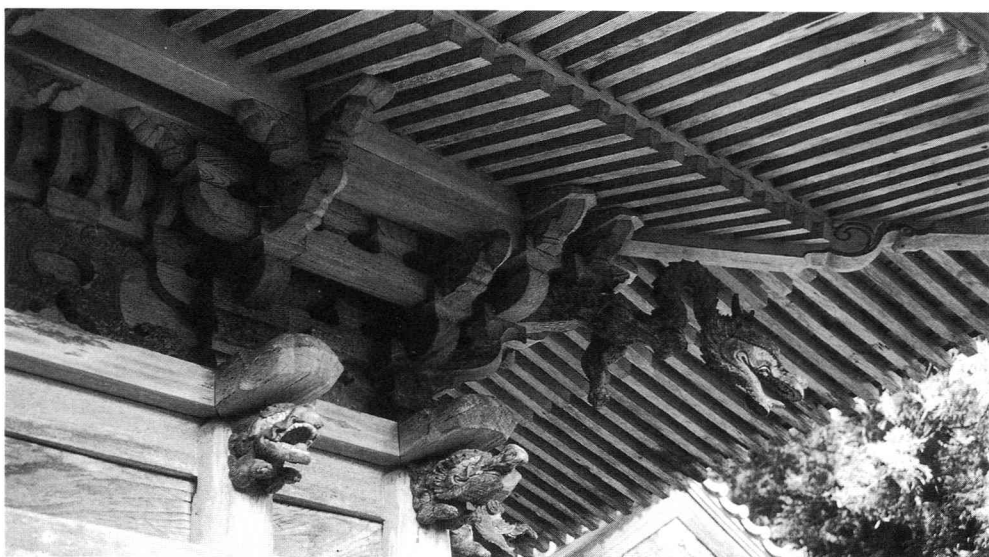
那古寺多宝塔（上重）



不動院三重塔（初重）



安久津八幡宮三重塔（初重）



普門寺三重塔（初重）



普門寺三重塔（二重）



安洞院多宝塔



妙宣寺五重塔（初重）



観音経寺三重塔（初重）



最乗寺多宝塔（上重）